

1. 加治川をひらく
2. きたないニッポン
3. 憂ありて備え僅少
4. 新しい土木技術者を育てる



1. 先般の新潟県北部の豪雨で加治川が氾濫したが、最終的に一級河川である阿賀野川の堤防を切り開き、内水排除を促進し、民心の安定を計ったという報道に、少なからず、何とも後味の悪い感じがした Civil Engineer が多いのではなかろうか。近隣の中小河川の氾濫を大河川の開さくで処置するとゆう異常事態は、かってないことである。ところがなるほどと思われる判断があったようだ。阿賀野川の上流には奥只見や田子倉ダム等有名なダム群があり、その貯水量の余力が何といっても力強い判断の基本になったようである。それに加えて、1日半で導水路開さく工事が完成するという急速機械施工能力が物をいったようだ。このように緊急事態に対しては、現場担当者はますます広い客観的条件を絶えず見つけておくことが適格な判断を生むことになると思われ、移り変わる社会の動き、民心の動向に適合した処置をするには、今までに経験しない対策が生れることがあることに気が付き、後味悪さも少し解消した次第である。

[J]

2. 最近各方面でとりあげられている問題に、大気・河川および海域の汚染がある。都会の騒音を逃れ山や海に行っても、都会の同様な汚れが目につき、自然本来の姿を楽しめる所はいよいよ少なくなりつつある。近代文明が生み出した数々のへい害は、直接的にはわれわれの生命をおびやかすまでには至っていないとしても、日々の生活の楽しさを相当減じている。そのため、土木に関係する多くの研究者や技術者が、研究テーマとしてこれら汚染・汚濁の問題と取り組んでいるが、ここで少しばかり考えなければならぬ点があると思う。きれいな空気や水を使ったら、再びもとのようなものにして、自然に返すことが当然で、このようなことは小学校の道徳教育でも教えているはずである。しかし何かといえば汚染の許容量はこの程度で、汚染を許容量以下に留めれば良いというような考え方はどうも私には納得が行かない。大気や水の汚濁の問題は一企業だけでなく国全体の問題である以上、いかなる犠牲を払っても解決しなければならないはずであるのに、まだこれといった措置が十分とられず今日に至っている。「自然を汚さず美しく」といかに子供達にいても、現在のような状態が続くかぎり、日本はより大規模な汚染でよごれて行くのではないか。

[C]

3. 人類が社会という組織形態を必要とするに至った理由の一つに“安全に対する欲求”があげられると思う。そして土木技術は主として自然環境からの人間の安全を保障する施設の必要から生まれ、数千年の歴史を経て現在の姿にまで発展してきたものと思える。“安全に対する欲求”は現在に生きる人間として変わることはあるまいが、自らの安全を求めて諸技術の結集で形作られた社会環境から安全への侵食が進みつつある現在、土木技術のみは、“ブルーアス汝もか”の類に墮すことなく、現在までの安全を維持してきた実績を基に、より確実な安全を保障する技術へと発展してこそ人類に最大の幸福を約束する技術といえよう。ところで、技術革新のテンポの遅い間は十分長い期間にわたって当初の安全度を保持できたであろうが、技術革新のテンポの早い現時点にあっては、状態の変化によって安全度も下り、危険な状態になることも少なくない。状態の変化に応じて安全度も応じ得るような態勢を整えることは、土木技術のみでは不可能ではあるが、可能な限りの努力が要請されることは当然であろう。“備えあれば憂なし”ということは、いつの時でも通用する格言であり、憂ありて、備え僅少ということがごとき現状を脱却し、“安全さ”を確実に、早く、経済的に、楽に保障することのできるように土木技術を発展せしめたいものである。

[S]

4. 昨年の実績からは想像もつかないような就職天国を飲んでいるのが高専であろう。3倍ぐらいの求を前に、関係者は嬉しい悲鳴を上げているようだ。ここで願うことは、今後の採用者側の建設的な態度であろう。新しい中堅技術者の存在を意義あらしめるためにも、目前の景気に左右されない、より高い見識に立脚した今後の採用方針を望みたい。

[E]